

第25回 東京芸術文化評議会 議事要旨

- 1 日 時 平成30年10月24日（水曜日）13時00分から14時00分まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 青柳評議員、太下評議員、大野評議員、仲道評議員、日比野評議員
松任谷評議員、吉本評議員、小池知事
- 4 議 事 (1) Tokyo Tokyo FESTIVAL 企画公募 選定案件について
(2) Tokyo Tokyo FESTIVAL プロモーションの展開について

5 発言内容

○青柳会長 ただいまより、第25回の東京芸術文化評議会を開催いたします。

本日は、秋元評議員、浅葉評議員、猪子評議員、川上評議員、キャンベル評議員、小山評議員、それから野田評議員、矢内評議員が所用によってご欠席でございます。また、日比野評議員は少し遅れて到着するとの連絡が入っております。

それでは、ここで小池知事のほうからご挨拶をお願いしたいと思います。

○小池知事 皆様こんにちは。今日はお忙しいところ、ご多用のところ、万障繰り合わせてご出席を賜りまして、まことにありがとうございます。

さて、芸文評、東京2020大会が迫る中で、文化面での発信をどのようにしていくのかということで、皆様方にはいろいろとご協力いただいております。

オリンピックまで639日ということかと思えます。

そして、スポーツの発信だけでなく文化を発信しようという趣旨で、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」という企画をいたしております。それも都民の皆さんからいろいろとアイデアを募っていただくという形で、公募をさせていただきました。その上で柱といたしまして、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の柱で3つ、「Challenge the "Mirai"」、未来への挑戦。それから「No Borders」、境界はないということと、伝統と革新という意味で、「Old meets New」、この3本柱でもってご審査いただいたところでございます。

これも、東京大会のレガシーとなるように、この文化プログラムをぜひとも力を入れてやっていきたいと思っております。

そして、いかにしてプロモーションを展開していくかということでございますが、まず「Tokyo Tokyo FESTIVAL」のブランディングを強化をしていくということで、この後、事務局のほうからご説明をさせていただきます。

それから、企画公募を含めた東京文化プログラム全体につきましては、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」プロモーションを展開いたしまして、大会をスプリングボードにして、「芸術文化都市東京」だということを世界に決定的にしていくということで、また、引き続きご協力のほど、よろしくお願いを申し上げます。

世界への発信、文化を通じての発信でございます。

よろしくお願ひいたします。

○青柳会長 どうもありがとうございました。

続きまして、本日は初出席となる評議員の方がいらっしゃいますので、ご紹介したいと思ひます。

松任谷由実評議員です。

一言ご挨拶いただけますでしょうか。

○松任谷評議員 どうも皆様はじめまして、松任谷由実です。

昨年全国80ステージのツアーをしております、この評議会は2回欠席になってしまいました。失礼いたしました。

初めて、出席させていただきます。有識者の方々のいろいろなご発言を自身の勉強として、そしてせつかくアーティストでお呼びいただいたので、それらを右脳を使って、これは素敵だと、これは格好悪いとか、直感的に判断して、何かお役に立てればなと思ひます。よろしくお願ひいたします。

○青柳会長 どうもありがとうございます。それでは、早速ですけれども、会議次第に沿って進めてまいりたいと思ひます。

本日の議事は、公表前の内容が含まれておりますので、運営要綱に基づいて会議を非公開とし、後日資料や議事録を公開したいと思ひますが、いかがでございましょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

○青柳会長 ありがとうございます。それでは、そのようにさせていただきますので、恐れ入りますけれども、報道機関の方々におかれましては、ご退席願えればと思ひます。

ありがとうございます。

(報道関係者退室)

○青柳会長 それでは、まず、次第に記載のある評議員からの報告「TOKYO MET SaLaD MUSIC FESTIVAL 2018 (サラダ音楽祭)」から始めたいと思ひます。

それでは、担当していらっしゃる大野評議員のほうから、よろしくお願ひいたします。

○大野評議員 ありがとうございます。今ご紹介いただきました、大野和士でございます。

今年9月17日に、東京都交響楽団及び東京芸術劇場の提携をもって、「TOKYO MET SaLaD MUSIC FESTIVAL」というものを「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の催し物として新しく始めさせていただくこととなりました。

そして、それは音楽の面からもこのイベントを盛り上げて、2020年、そして2020年ビヨンドにつなげていきたいという思いを込めて始めさせていただいております。

そしてこの「SaLaD MUSIC FESTIVAL」というのはこう、聞きなれない名前かもしれませんが、これには「S i n g」のSですね、それが歌うのS、それから「L i s t e n」のL、そして「D a n c e」のDという文字の頭をとりまして、「SaLaD」とつけさ

せていただきまして、誰でも歌い、聴き、そして踊ることができる。ですから、皆さんが参加して楽しめるというような場を提供することを大きな主眼として始めさせていただきました。

そして、このフェスティバルを企画するに当たりまして、特筆すべきは東京都交響楽団の楽員のほうではございませんで、都響の事務局の若手の職員が中心となって、連日連日企画を練り、そして、私も時間のあるときにはそのプロジェクトチームに参加をしてお話をさせていただいておりますけれども、そういう形で、職員のほうから企画が上がってきたという、なかなか今までにはない形での音楽の企画・発展でありました。

そして、東京芸術劇場のみではなく、池袋エリアでその演奏会を実施をいたしました。

それではスライドの次のページですね。当日は、9月17日月曜日ですけれども、敬老の日だったということもありまして、大変盛況を極めたわけでございます。2回のコンサートを行いました。その第1回目は、「OK！オーケストラ」、これは何がオーケーかという「赤ちゃんOK！歌ってOK！踊ってOK！」というふうな題名を、やはり職員がネーミングいたしまして、オーケストラの演奏、そして近藤良平さんの率いるコンドルズのダンス、そして池袋在住の児童合唱の皆さんのコラボレーションを交えまして、コンサートを開催しました。

皆様もご承知のとおり、通常のオーケストラ公演などでは、小さなお子さまは入場できないということなんですけれども、この「OK！オーケストラ」はとにかく全てオーケーです。赤ちゃんオーケー、お父さんお母さん、そして抱っこして、あるいは肩車して聴いていただくこと、全てオーケーなので、ふだんはなかなかコンサートにいらしていただけない親御さんを含め、そして赤ちゃんですね、リラックスして家族で楽しんでいただけたというふうに思っております。

当日はどうしても、止めようと思って止められない赤ちゃんの声がずっと、小一時間の間のコンサート中響き渡っていたわけです。そしてその中には笑い声もあったり、泣き声だったり、あるいは大きな叫び声が突然聞こえてきたりするわけですけれども、そういう中で、楽員も笑みを絶やさずというのでしょうか、それをとてとて、自分たち自身も癒しと感じまして、そして演奏いたしました。そして、たまに火の鳥の爆音がばーんと聞こえるようなときには、今まで泣いていた赤ちゃんが黙ってしまったとか、あるいは、逆にまた、きゃーっという嬌声が聞こえたり、とにかく演奏会とは思えない雰囲気のまま、和気あいあいと進んでいったということでございます。

それでは、3ページ目です。2つ目は、夜に行われましたメイン・コンサートである「プルミエ・ガラ」という、ガラというのは特別なお祭りという意味なんですけれども、実は、このコンサートに小池知事の臨席を賜りまして、オリンピック・マーチで幕あけをしたんですけれども、そのオリンピック・マーチを指揮してくださったのは、ほかでもない、小池知事ご自身であられました。

そして、楽屋話ですけれども、私が事前に、本当に一、二分、こういうふうに手を挙げて、そして振りおろしてくれというようなことを申し上げたのですけれども、知事のほうでは、もう何回も曲を聞いていらして、すっかり身につけていらっしやったということで、本番は、古関裕而さんの1964年の東京オリンピックで作曲された、有名なオリンピック・マーチをすばらしい立ち姿で、しかも、棒は金でできていたのです。ゴールドでできている指揮棒を振りながら、大変優雅な姿で指揮をしていただいたということで、大変すばらしい幕あけとなりました。

二部では、カール・オルフというドイツの作曲家の作曲したカルミナ・ブラーナという、世俗カンタータという名前で見られている、声楽と、それからオーケストラ、そして、それにオリジナルにはダンスを入れる場所が指定してあるという、またその「SaLaD」にふさわしい曲目を祝典曲として取り上げました。そして、この曲は、中世ドイツの大学生たちが、学業の傍ら街に繰り出して行って、そしてお酒を飲み、そして恋人たちと語り、それがゆえに、世俗カンタータという名前がつけられているのですけれども、酒、そして恋ですね。そうしたものに興じる若者たちの姿が描かれているということで、このサラダコンサートのガラコンサートにとってもふさわしい曲であり、コンドルズのダンスとも相まって、大変エネルギッシュな舞台となったということでございます。

それでは、4ページ目の、この子供さんたちのコンサート、そしてガラコンサート以外に、池袋周辺のさまざまな施設、その中には商業施設などもございましたけれども、そういう場所を提供していただきまして、弦楽四重奏や合唱などのミニコンサートを行い、このコンサートにも大変たくさんの方が足をとめて、熱心に聞き入ってくださったということで、まち全体の盛り上がりを感じました。

それでは、続いてお願いします。

さて、今回のこのコンサートのもう1つの大きな私たちの目的というのは、ワークショップでありました。芸術劇場の地下二階には、幾つかの、今ここで写真に出てまいりますような小さなスタジオのような部屋がありまして、音も出せる部屋なわけですが、そこで東京都交響楽団の楽員の指導で、本物のバイオリンやチェロ、お子さんのための小さいチェロも用意させていただきまして、楽器をさわって、とにかく自分で弾いてみましょうというようなワークショップです。それから、コンドルズの行ったダンスのワークショップですね。そして、自分で楽器をつくってしまおうというようなワークショップとか、いろいろなワークショップ、それにももちろん、オペラ歌手が歌って歌を教えるワークショップなど、さまざまなワークショップを行いました。

そして、このワークショップに、どこからこんなにたくさん親子の皆さんが来ていただけたのかと思うほど長蛇の列ができて、1つ1つの部屋は小さいスペースなんですけれども、そこに本当に人が延々と並んで、その機会を今か今かと待っているというのが大変印象的でした。

そういうことが、恐らく、今後も長く日本の音楽界においても提供していくというのが、課題なのだというふうに思った次第であります。

ということで、大体その概要についてはご説明申し上げました。

そして、まとめといたしましては、私たち、仲道評議員含めまして音楽家の立場として、生の音楽をできるだけ多くの方々に提供して、そしてその方々がその音楽を聞きながら、うきうきして自然に体を揺らし、躍動するという喜びを感じていただくというような機会をこれからも提供していき、それを拡大して、2020年、そして2020年を超えて、知事の言われた、そのレガシーとして、私たちがはっきりと将来的なビジョンを描くということがとても重要なことだというふうに思った次第でございます。

ありがとうございました。

○青柳会長 どうもありがとうございます。

それでは、今、大野評議員からご報告がございました「サラダ音楽祭」に関しまして、ご意見やご感想がございましたら、ぜひ。

指揮をなさってどうだったのですか。

○小池知事 指揮は大変緊張いたしました。都響の皆さんが上手でございますので、素晴らしい演奏になったのではないかと思います。

何よりも雰囲気、よくロイヤル・アルバート・ホールで行っている、BBCなどをやっているプロムス、ああいう雰囲気があると本当にいいと思って、それを芸術劇場が舞台になるということはとても好ましいなと思って。

○青柳会長 ですね。

○小池知事 はい。その試金石になったかと思えます。

○青柳会長 私、あのプロムス、あれは大体7月から9月までずっとやって、BBCが、イギリス中でやって、それで最後に、イギリスよ、偉大なれとみんなで歌うんですよ。素晴らしい。

それは別として、何か仲道さん、あります。

○仲道評議員 実現なさるにはさまざまなご努力と、エネルギーがいったと思えますけれども、こういった形で実現できて、また続いていくと素晴らしいなと思えます。

○青柳会長 この間、知事も会っていただいたんですけども、フランスのナント市長をされ、その後フランス首相に就き、外務相を経験したジャン＝マルク・エローさんが、ラ・フォル・ジュルネを始めましたですよ。ああいうふうに、クラシックでも何でも身近な音楽になるといいなと思って、そういった取組としては素晴らしいと思えますね。これからもぜひ、いろいろお願いいたします。

ありがとうございました。それでは、来年度はぜひぜひ拡大したもっと素晴らしい、そして、知事にも何曲も指揮をしてもらうような、そういうものをしていただきたいと思います。

○青柳会長 それでは、次に進みたいと思います。

今、遅れてというか、意外に早くお着きになった日比野さんがいらっしゃいましたので、一言お願いします。

○日比野評議員 申し訳ございません。午前中、瀬戸内で前から入っていた用事がありまして、羽田からギリギリ、ちょっと遅れましたが、すみません、よろしく願いいたします。

評議会では、松任谷さん、はじめまして。よろしく願いいたします。

「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の話、広報の話、本当いろいろ、私もリーディングプログラムでTURNプロジェクトをやらせていただいている、障害者施設とアーティストが交流して、より新しい多様性の社会を築いていこうというプログラム。確実にいろいろ、東京都だけではなくて日本各地とか、あと世界各国で、特に南米が多いんですけども、展開しております。そういうものも、より、発信していけるような工夫も「Tokyo Tokyo FESTIVAL」、合わせて、今日お話ができればと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○青柳会長 ありがとうございます。

僕も日比野さんのTURN、1つ見せていただきましたけど、すばらしく、こう、地域の方々と交流してですね。だから、東京が、何となくオリンピックが東京のものだけだと言われる感じを、ああいう、日比野さんが活動していると、全国でやっていくんだという盛り上がりにつながるんじゃないかと思って、大変感心しました。

それで、今、日比野さんが触れられました「Tokyo Tokyo FESTIVAL 企画公募 選定案件」について、それから、「Tokyo Tokyo FESTIVAL プロモーションの展開」について、事務局のほうからご説明をお願いしたいと思います。

○魅力発信プロジェクト担当部長 それでは、まず初めに、「Tokyo Tokyo FESTIVAL 企画公募 選定案件」等についてご説明させていただきます。

企画公募事業につきましては、昨年11月の芸術文化評議会で公募の開始に向けて概要をご説明したところですが、このたび案件の選定が終わりましたので、改めてご報告させていただきます。

1の「事業趣旨・概要」でございますが、この企画公募事業は「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の中核となる事業の企画を広く一般の皆様から公募し、人々の記憶に残る文化プログラムを構築することを目指し、実施するものでございます。募集は今年の2月に行い、2,436件という大変多くのご応募をいただきました。また、国内のみならず、海外28の国・地域からも114件の応募がございました。

2の「選定状況及び今後の予定」でございますが、審査につきましては、書類審査及びプレゼンテーション審査を行い、今年の8月に13件の企画を選定いたしました。13件の選定企画は、多くの皆様に楽しんでいただける魅力的なプロジェクトとなるよう、現在、

準備を進めているところでございます。

審査会委員の名簿は次のページになっております。

また、審査に当たりましては、9ページにございますように、「Challenge the ” Mirai” 」、「No Borders」、「Old meets New」の3点を重視して選定しております。

選定企画につきましては、公表時期、方法について検討段階のため、本日は、恐縮ですが、具体的な企画名や内容の詳細についてお示しできませんが、幾つかの事業イメージをご紹介します。

まず、東京の様々な場所を活かしたプロジェクトでございます。東京を象徴する高層ビルを活用したプロジェクト、都内の島で実施予定のプロジェクト、川、水辺を舞台としたフェスティバルなどがございます。

次のページでございます。次はアートとテクノロジーを融合したプロジェクトでございます。

ロボットの動きに人間の動作を学習させ、アート作品をつくるプロジェクトや、最先端のテクノロジーを活用し、多くの人に参加できるプロジェクトなどがございます。

続きまして、13ページ、世代や国を超えた多くの人を対象としたプロジェクトでございます。子供が主役のものから高齢者に焦点を当てたもの、海外のアーティストが実施するものなど、様々な人が参加したり、楽しめるプロジェクトを実施してまいります。このほかにも、生活文化関連のプロジェクトや建築関係のプロジェクトなど、国内外の多くの皆様に興味を持っていただける企画の準備を進めております。それぞれのプロジェクトの具体的な内容は、効果的なPRのタイミングを考慮しながら、順次発表してまいります。

企画公募につきましては以上でございます。

続きまして、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」プロモーションの展開についてご説明させていただきます。

昨年11月の芸術文化評議会で、東京文化プログラムの発信強化についてご説明させていただきました。内容といたしましては、オリンピック・パラリンピックに向けた文化の取組をTokyo Tokyo FESTIVALと銘打ち、ブランディングに取り組むとともにプロモーションを展開し、国内外の発信と拡散力を高めていこうというものでございます。その後、プロモーションやブランディングについて検討を進めてきたところですが、今後、本格的なプロモーションを展開するに当たり、その考え方をまとめましたので、ご説明させていただきます。

内容のご説明に入る前に、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」のプロモーションやブランディングの今後の進め方につきましてご報告いたします。

今後の進め方につきましては、統括プロデューサーに代わり、本評議会及び評議会のも

とに設置している文化プログラム推進部会でご議論いただきながら進めてまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いたします。

それでは、内容の説明に入らせていただきます。資料の方をご覧ください。

こちら、まず最初のスライドは、Tokyo Tokyo FESTIVALの定義等に関しまして、改めて整理した内容でございます。まず、「表記の一本化」についてでございます。これまで大会期間を含む約半年間に実施する文化事業を「Tokyo Tokyo FESTIVAL」、それまでの期間に実施する文化事業を、「Road to Tokyo Tokyo FESTIVAL」としていましたが、2020年に向けて現段階から継続的な気運醸成に向けた取組を行う必要があることから、このような事業期間による区別を設けることなく、全ての東京文化プログラムを「Tokyo Tokyo FESTIVAL」として統一的にPRを展開したいと考えております。

次に、「対象事業の拡大」でございます。これまでのTokyo Tokyo FESTIVALの範囲は、東京都、東京都歴史文化財団、東京都交響楽団が主催する事業のほか、民間等に対する助成事業としておりましたが、オール東京としての文化の盛り上げを図るため、都内の区市町村が主催する文化事業で申請があったものについても、Tokyo Tokyo FESTIVALの対象事業に加えたいと考えております。

続きまして、2020年に向けたプロモーション、ブランディングの展開の考え方でございます。大きく分けて、3つの構成で考えております。「基本広報」、「認知拡大・参加誘発」、「ブランディング基盤強化」でございます。

「基本広報」につきましては、ポスターやバナーの掲出、映像の活用、ホームページの充実によるウェブでの情報発信などを実施してまいります。

青色の部分、「認知拡大・参加誘発」では、多種多様なTokyo Tokyo FESTIVALの認知を国内外に拡大し、様々な形での参加を誘発できる仕掛けをしていきたいと考えております。方向性といたしましては、節目節目でのショーアップ的な取組、2020年の最盛期でのプロモーションの展開、先ほど申し上げた都内区市町村の文化事業との連携でございます。

緑色の部分、「ブランディング基盤強化」につきましては、インフルエンサーを活用したTokyo Tokyo FESTIVALの発信、海外のイベントとも連携し海外に向けた発信、多様な国内イベントとの連携を考えております。

こうした考え方に基きまして、今後具体的な取組を展開してまいります。次に16ページの資料には、現在検討中の内容を例示しています。具体的な取組につきましては、検討の結果がまとまりましたら、改めまして評議員の皆様にご報告させていただきたいと考えております。

続きまして、次の17ページでございます。プロモーションの一環といたしまして、11月9日に羽田空港でイベントを開催いたします。内容は、Tokyo Tokyo FESTIVALの紹介、特別ゲスト市川海老蔵さんの演舞、小池知事、市川海老蔵さん、吉本評議員によるトークセッション、東京都交響楽団による弦楽四重奏などを予定しております。

こちらのイベントの実施につきましては、10月26日の知事の定例会見にて公表予定でございますので、公表まで情報管理につきましては、ご配慮のほど、よろしくお願いたします。

事務局からのご説明は以上でございます。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、今お話ございました「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の企画公募、選定案件と、それから同プロモーションの展開の内容について、ご意見等ございましたらお願いしたいと思いますが。

まず、選定の委員長をやってくださった吉本さん、何か。

○吉本評議員

先ほどの資料にもございましたが、何せ2,500件の応募があったということにして、そこからアーツカウンシルの事前審査で、たしか250件ほどに絞り込んでもらい、その後、審査委員会で150～160件を選んで書類審査をした後、約60件を選定してプレゼンテーションによる審査を行いました。その最後の審査は、青柳会長にも太下評議員にもご協力いただきましたが、はっきり言って、大変でした。

プレゼンテーションは、4日間、朝から晩までかかりましたが、皆さん本当に熱心でした。海外からの提案も結構あったんですけども、ヨーロッパ、南米からわざわざ東京にプレゼンに来てくださったところもありました。選ばれた13件にはいろんなバリエーションのものが含まれていますので、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」のシンボル事業として、ぜひ成功してほしいなというふうに思っています。

それからたまたま、先週、香港の国際会議に行っていたんですが、そうしたら、シンガポールの若い劇団の人が参加してしまっていて、企画公募に応募したというんですね。

つまり、この「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の企画公募を国際的に開いたということで、東京にはすごいチャンスがある。オリンピックのときに、世界中のアーティストにそういうチャンスを提供しているというのが、国際的に広がっているなど、これも1つの大きな成果だと思います。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

そのほかに何かございますでしょうか。

何かあったらどうぞ、目があってしまいました。

○松任谷評議員 目があってしまいました。

文脈が飛ぶかもしれませんが、今テクノロジーとのコラボレーションのページがありましたが、常々パラリンピックって、すてきななって思っているんです。いわゆるオリンピックのほうが、当然、脚光を浴びますけれども、何か科学オリンピックなんじゃないかな。とても未来的で、アンドロイド的で、パラリンピックとそのテクノロジーをどこかこうい

うイベントで連携させて、eゲームとかはすごい勢いで中国を中心に広がっていますけども、そういうスターを、パラリンピックでこういう装備でこれだけ走れるとか、ウィルチェアーがこんなにすごいとか、そこを連携させて、若いテクノロジー好きの男の子たちとかが夢中になって見るようなゲームがあったら、すごく広がるんじゃないかなと思っています。

○青柳会長 ですね。確かに、パラリンピックのほうで、今足がない人があれて、あれをもっともっと発達すると、恐らく肉体だけよりも早くなるんじゃないかという予想もありますし、それからウェアラブルなものがいろいろこれからできると、これはもう身障者の方だけじゃなくて、健常者の人にとっても日常の生活の助けになっていきますから、そういう意味では社会貢献もすごく大きいですよ。

だから、松任谷さんがおっしゃるように、あれはサイエンスオリンピックということの本当に言えると思います。気がつきませんでしたけれども。

そういうことをインプットして、みんなでいろいろ知恵を出しましょう。

○松任谷評議員 ありがとうございます。

○青柳会長 ほかに、どうぞどうぞ。

○仲道評議員 すばらしい企画がたくさんで、私、思うんですが、オリンピックに向けてのさまざまな文化プログラムって、その後に必ずアカデミックに語られるときが来ると。それは、もう数値で、例えばこれだけ集客したとか、それから経済効果がこれだけあったということだけではなくて、語られる時代にそのオリンピックの後がやってくると思うんですね。

となったときに、この機運に乗って、せっかく行われているさまざまが、何らかのムーブメントが起きたとしても、果たして、それがその後、続いていくのかであるとか、それにどんな意味を見出すのであるとか。今のこの時代だから、立ち上がってきた本質的なテーマが一体なんであったのかということを一言で語れる何かがあれば、きっとレガシーとして残ると思うんです。せっかくのこの機運をそういった観点も踏まえて、ぜひ推進していただけたらと思います。

○青柳会長 太下さん、何か。

○太下評議員 先ほど、事務局のほうから、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の企画公募のお話をいただきましたが、私も選考委員として、先ほど吉本さんがおっしゃったように、丸4日間審査に参加させていただきました。この「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の企画公募と、あと既に先行して行われている日比野さんの「TURN」であるとか、大野さんの「サラダ音楽祭」のようなリーディング事業、さらに、あと、並行して行っている助成がありますから、大体文化プログラムの事業の大枠というのは固まってきたのかなというふうに思うのです。そして、現実的な問題でいうと、多分、資金もマンパワーもかなりいっぱいではないかと思うのです。

そこで今後、考えていくべきことは2つあるかなと思っています。

1つは、今日ご紹介のあったそのプロモーションです。残念ながら、まだ文化プログラムの認知はそんなに進んでいないと思います。日本人の気質からして、直前になるとかなり盛り上がるのでしょうけれども、そうした盛り上がりを早目からやっていく手だてはいろいろあると思ひまして、もうそれは既に事務局のほうでもお考えであると思ひます。

もう1つは、今、仲道さんがおっしゃったレガシーですね。どういうレガシーを残していくのかということのを第一に考えて、事業もこれ以上ふやすのではなくて、仕組みの変革をしていくことに知恵を使うべきタイミングかなと思っています。

その点に関して、3つ手短にご提案したいのです。1つは、ナショナルハウスについてです。吉本さんもご一緒に行きましたけど、リオのときは、たしか三十数か国がこのオリンピック・パラリンピックの期間に、その国文化であり、観光であり、時には製品とか、そういったものをプロモーションするナショナルハウスをリオ市内につくっていました。それは既存の施設の改築、コンバージョンのケースもあれば、新しく仮設の建築をつくるケースもあり、さまざまです。基本的には、出す側の国がお金を負担してやるものです。これを政策的にちょっと後押しできないかという提案です。どういうことかといいますと、ナショナルハウスは3カ月たつと消えちゃいますから、非常にもったいないんですね。各国の文化的なプロモーションの場でもありますから、もし東京都がそこに助成金なり何らか資金的な援助、または土地とか建物とか遊休施設を提供するみたいなことをして、終わった後は、今度はその国がプロモーションの場として、一定期間は維持するという条件があれば、東京都もプッシュしますよと、そういう枠組みがあれば、このオリンピックが終わった後もナショナルハウスがレガシーとして、確実に都内に残るわけです。こういう姿というのは、かつての都市ではないですから、IOCとしても、すごくウェルカムな形になるのではないかと思います。ナショナルハウスをその場限りで終わらせない。もったいない精神です。レガシーとして残るように政策的にプッシュできないかというのが1つ目の提案でした。

2つ目。2012年のロンドン大会は大変な成功だったということで、イギリス人たちが東京に来て盛んにプレゼンテーションをしていきました。そのレガシーの中心として、アンリミテッドという障害者による芸術表現ということを彼らは実施して、いまだにそれは続いています。多分、東京でも盛んにやっていくと思うのですが、あれはイギリスのレガシーです。ですので、多分それこだけやっても、世界の人には、「いや、すばらしい、イギリスのレガシーをうまく東京は引き継がれましたね」と、「ところで、東京のレガシーは何ですか」というふうに問いかけると思うのです。このレガシーについてはいろいろな選択肢があると思うのですが、私はやはり世界で一番早く超高齢国家になり、その数も極めて膨大な数の、この日本、東京が、高齢者が文化で生き生きと暮らせるという姿をいち早くつくるべきではないかと思っています。

私は、古いタイプなので、毎日、普通の紙の新聞を読むのですけれど、必ず毎日のように高齢に関する記事が出てきます。ただし、それはことごとくみんな暗いニュースなんです。高齢者が増えることによって財政負担がどうか、高齢者施設での虐待であるとか、認知症が徘徊でどうか、高齢者の運転による事故が増えたとか。そんな記事ばかりです。

ただ、少子化、高齢化と一体で語られますけど、少子化は多少なりとも政策が関与できます。もっと子供を産みやすい、育てやすい社会をつくれるのですけど、高齢化に対しては政策は何もできないのです。むしろそこに関与すれば、より高齢者が長生きするだけです。すなわち、超高齢社会はもう確実に来る未来、変えられない未来なのです。この変えられない未来をみんなが暗い、暗いと言っているでも全く始まらないと思うので、むしろ逆に、アートの高齢者が生き生きと、明るく暮らせる社会を提案できれば、世界中がきっと東京に学びに来るのではないかと思います。

それは多分IOCとしても、すごくウェルカムなレガシーになると思います。ご案内のとおり、次のオリンピックはパリで、その次のオリンピック、ロサンゼルス、これは同時に決まりましたよね。こんなことは史上なかったことです。何で同時かという、もはやオリンピックをやりたいという国がないということなのです。このことにIOCは極めて危機感を感じていると思います。特に2度目、3度目の開催の場合ですよ、パリでもロンドンでも。そういう成熟した国が2度目、3度目のオリンピックをやる意味ということについては、実は答えがないのです、まだ。この意味を東京が、初めて、もし出すとしたらすごいことになるのではないかと思います。これが2点目の提案です。

3点目はすごく現実的でちっちゃい提案です。もともと、このオリンピックの文化プログラムの企画は、先ほど言ったとおり、イギリスからプレゼンテーションを受けて始まりました。イギリスは17万7,717件もやったぞとかいうことでしたが、これは数字が間違っていたんですけど、実は。それを受けて、文化庁は20万件やるという目標を立てました。実は17万じゃなくて、7と1の転記ミスという考えられないようなミスがあって、本当は11万7,000だったので、イギリス側は密かに資料だけ訂正しています。それがわかった後に、文化庁は、昨年12月末に、こっそりと新しい方針というのを出しているのです。このことは余り知られていないのですけど、それを読むと文化プログラムの数にはこだわらず、とさらっと書いてあります。要は20万件やめますという話なのですけど、別に数が目的ではないので、数の目標を取り下げるのはいいのですが、同時に恐らく文化庁さんは文化プログラムの数を数えることもやめちゃったような気がするのです。

そもそものイギリスの17万なり11万という数も、実は数え方のルールがないのです。非常にアバウトで、各現場が数えてきた数字を単に中央のアーツカウンシルが集計しただけというものでした。

こういう実態を聞いてしまうと、ちょっと日本人としては、何かむずむずするのですよね。

やっぱり、日本でやるからには、東京でやるからにはきっちり数、1つのアクティビティというのはどういう定義なのということを引ききり定めて、だから何件でしたという集計が必要だと思います。別に多かったからえらいというわけじゃないです。ただ、実施した数はデータとしては確実に必要です。どうせ聞かれますし。

このカウント方法をいち早くつくって、先に世界に発表しちゃえば東京方式ということで、今後、全ての文化プログラム、どこの都市でやるにもこの東京方式で数えられるようになると思うのです。これはちょっとしたアイデアですけど。

とにかく、後に、東京はどういうレガシーを残したのですかといったときにわかりやすいものを幾つか柱をつくってやっていくべきだと思います。今言った3つともそんなにお金がかかる話ではないです。今はこういうことに知恵を振り向けていくタイミングが来たのかなというふうに思っています。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

3つご提案いただきましたけども、すぐ思いつくのは、一番最初にインターナショナルハウスは、ヴェネツィア・ビエンナーレなんかは、みんなあその地域に、それぞれの国が建物をつくって、それでビエンナーレごとにそれを使うというやつですよ。

だけどもあれ、ビエンナーレ開いてないときはすごい寂しいんですよ。だから、もうちょっと共用できるような形でのインターナショナルハウスだと、なかなかおもしろいと思いますね。

それから、次の高齢者だけど、高齢者の件は、このTTFの企画公募に、「Challenge the “Mirai”」と「No Borders」と「Old meets New」、これはみんな高齢者もかかっているんですよ。だから、こういう中で高齢者をもっと活用というか生き生きやってもらおうと同時に、高齢者も実は本当の高齢者になってくると障害者になるんですよ。だから、時間軸での障害者と、それから同時的な、若いときからの障害者と健常者というものと、その縦軸と横軸を絡めて総体的に考えなくちゃいけない。だから、そういう意味で、太下さんのお話はおもしろいですよね。

それから、最後のところもあれですけど、何か今のご意見に対して。

日比野さん、何かない。

○日比野評議員 まず、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」、やはり公募というのはすごく話題になって、これから発表されると思うんですけども、もう1つ。申請すれば「Tokyo Tokyo FESTIVAL」として認めますよという、都内で区内で行っている既存のいろんなプログラム、あと歴史文化財団が主催している等々のものは、やはり、自分が参加できるんだ、自分がオリンピックに参加できるんだということを、まず告知するというのが、それによって、この会議の分科会でも随分前にちょっと話したことがあるんですけども、大きな予算のプログラムもあるけれども、既に自分のところの、例えば町内会でやっている夏祭

りであるとか、ちょっとした収穫祭であるとかという既存のお祭りとか、あと子供会でもいいのかもしれないし。そういうものも、例えば、10人ぐらい集まって低予算でやっているような、そういうものも、まさか自分たちの毎年やっているものがオリンピックのプログラムになるのかなという、そのわくわく感ってあると思うんですね。

でも、何かの告知で知って、申請すれば「Tokyo Tokyo FESTIVAL」に参加できますよということになると、多分そこでモチベーションが上がっていくと思いますので。

ぜひ、大きな公募展のプログラムがどかんときっとこれから出ると思うんですけども、あなたのまちの既にやっているものも、東京オリンピックの文化プログラムになりますよ、ぜひ参加しましょうというような告知をすると、自分事としてオリンピックが迎えられる。

今、組織委員会のほうでボランティアの公募が始まっていますけれども、きっとあれもいろいろな、僕もニュースで見ていると、さてさて集まるかなという様子もあるんですけども、やはり積極的に参加して、僕もいろいろな地方に行って、地方から参加しますというような人たちもたくさんいるんですね。

なので、具体的に参加できるプログラムがあれば、みんな、この「Tokyo Tokyo FESTIVAL」に参加したいって、必ずそういう気持ちになって、彼らがPR、発信する母体になってくれると思います。

きっとそういう本当にちっちゃなちっちゃな集団こそが、一応、それがすごいプロモーションになると思いますし、結果的にきっとそれがレガシーに、その後オリンピックが終わった後も、「楽しかったよね、あのオリンピック」、「オリンピックは次は違う国に行ったけれども、私たちはまたそれを続けてやっていこうよ」というのが、僕も経験上、ああいう地方の芸術祭たくさんあるんですけども、やんごとなき理由で芸術祭が何か終わったりした後も市民参加型のプログラムというのは確実に残っていくんですね。その意味でもレガシーということでは、いわゆる行政が予算が云々かんぬんじゃなくて、経験したことによって自分たちでやっていこうよという、そういうものになっていくのが一番のレガシーになるのではないかと思います。

○青柳会長 それに対して、吉本さん何か。

○吉本評議員 これからプロモーションを展開していく中で、今、日比野さんのおっしゃったことはとても重要だと思います。今日、事務局から報告があった市区町村でやっているものも「Tokyo Tokyo FESTIVAL」に入れましょうということも含めて。これはロンドンのときにも言われたんですけども、文化を通して誰もがオリンピックに参加できますということは、文化プログラムの非常に重要な役割だと思うんですね。そこを含めて、水平に広げていく広報も必要だと思うんですけど、もう1つ、やっぱり、国際発信ということを考えると、シンボリックなものをしっかりアピールすることが重要ですよ。だから、13件選びましたけど、その発表は、僕は個人的には直前まで伏せておいたほうがいいんじゃないかなって思っているんですね。そのほうがきっと話題になると思いますし。

それから、日比野さんの「TURN」だったり、野田さんのキャラバンだったり、オリンピックに向けてやってきた、ほかにも六本木アートナイトとか、中核的な事業がありますよね。やっぱりそれらも、国際的にきっちり発信して、東京は文化の都市だ、東京に行けば文化のチャンスがあるというプロモーションもしていただきたい。誰もが参加できて「Tokyo Tokyo FESTIVAL」でオリンピックに入っていけるというのと、国際的にアピールするというのと、両方の戦略が必要かなというふうに思います。

広く広めるという点では、やっぱり小池知事に、「いや、オリンピックは文化もやっているんです」ということを機会があるたびにご発言いただき、松任谷さんにも、70万人という話がありましたけど、東京は「Tokyo Tokyo FESTIVAL っやってるのよ」とちょっと言っていただけで広報の効果は絶大だと思います。

そういうこともあわせて、今後、事務局を含め部会でも議論しながらプロモーションの方法を検討していきたいと思います。

○青柳会長 おっしゃるとおりに、今、地方でも、東京の中のさっき言っていた市町村でも、どれぐらいのものだったらフェスティバルに参加できるって、それがわからないんですよ。ですから、できたら村祭りみたいなもので、それでちょこっと知事が出かけて行って、「いいわね」とか言って、それはフェスティバルでオーケーなんですよというのをYouTubeに出してもらって、それから「サラダ音楽祭」みたいなでかいものもフェスティバルになるんだというのもYouTubeに出してもらって。

それで、これぐらいの幅のあるものですということが誰にでもわかるような形でやっていただくと手を挙げる人がふえてくるんじゃないかなと思いますけどね。またいろいろお知恵を授かりたいと思います。

ただいま評議員の皆様よりいただいた大変貴重なご意見を踏まえまして、事務局では東京、日本のみならず、世界中の人々の記憶に残るようなすばらしい事業を実現させていただくとともに、2020年に向けて東京文化プログラムをより多くの国内外の方々に知っていただき、東京の芸術文化の魅力を伝えていただきたいと思います。

なお、事務局のほうから説明がありました11月9日のプロモーションイベント第1弾につきましては、明日の知事定例会見でお披露目となりますので、どうぞ情報の取り扱いにはご注意くださいと思います。

それでは、事務局のほうからの報告に移らせていただきます。

○文化振興部長 それでは、事務局のほうから報告を2つさせていただきます。東京芸術文化評議会の部会及び「パリ東京文化タンドム2018事業」のラインアップの2件につきましてご報告いたします。

まず、東京芸術文化評議会部会でございますけれども、前回の第24回東京芸術文化評議会におきまして、今期は2つの部会を設置させていただくということをお諮りさせていただきました。

1つは文化政策部会で、もう1つは文化プログラム推進部会でございます。それぞれの部会につきましては会長とご相談しながら少数精鋭の視点をもって記載のとおり専門委員の方々をもって構成して、ただいま議論を進めておるところでございます。

まず、文化政策部会ですけれども、これはオリンピック・パラリンピックが開催されます2020年以降も見据えまして、中長期的な視点をもって都の文化政策の方向性について議論するものでございまして、8名の専門委員で検討を進めております。これまで2回開催しておりまして、都立文化施設等の運営、それから文化事業の評価・検証を行う仕組みについて検討を進めてございます。

次にもう1つ、文化プログラム推進部会でございますけれども、これにつきましては東京文化プログラム全体を通じた目標や取組視点等の整理、各個別事業の位置づけの明確化や「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の推進について、6名の専門委員の方々に検討を進めていただいております。これまで3回開催しまして、先ほどご説明いたしましたけれども、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」企画公募の選定のあり方について方向性を示したほか、現在は「Tokyo Tokyo FESTIVAL」プロモーションの展開などについて検討を進めておるところでございます。

それから、もう一点ですけれども、「パリ東京文化タンドム2018」事業のラインアップについてご説明させていただきます。前回の評議会で、今年パリ市と協力しまして、文化交流事業を行うことをご報告させていただきましたけれども、事業の詳細が固まりましたのでご紹介させていただきたいと思っております。

まず、1つ目のスライドをご覧くださいと思います。東京ではこの9月よりアール・デコの展覧会や舞台芸術などのイベントを実施しております。それから、スライドの左下のイベント、「Saison Rouge」では在日フランス大使館、アンスティチュ・フランセ日本チームが中心となり実施し、パリの最先端の音楽、映画、ダンス、グルメなどを体感できるイベントなどを行ったところでございます。

それから、次のスライドをご覧くださいと思います。これから年末に向けまして工芸品の展覧会やオーケストラの公演などを開催し、東京では全部で8つのイベントを実施する予定でございます。

それから、続きましてパリで開催するイベントでございます、既にパリではアール・ブリュットの展覧会や東京をテーマにした写真展を開催しております。また、来月の上旬にはこちらに載っておりますけれども、「FUROSHIKI PARIS」と「からくり人形の動態展示」をパリで開催いたします。このうち、「FUROSHIKI PARIS」についてですけれども、パリの市庁舎前広場に東京からパリへの贈り物としまして、唐草模様の風呂敷包みをイメージしたパビリオンを設置しまして、その中で日仏のアーティストがデザインしたオリジナル風呂敷やインスタレーションなどをご覧くださいるものになってございます。ただいま知事から開いていただきましたけれども、お手元にタブロイドの冊子がございますので、

それをご覧いただければと思います。

○青柳会長 すごいですね、いいですね。

○文化振興部長 また、市庁舎壁面に歴史的人物の石造に風呂敷を持たせるインスタレーションなども実施する予定でございます。

○小池知事 ちょっと加えますと、これがパリの市役所なんですね。そこの広場にこのどでかいこの風呂敷を、まさしく大風呂敷を広げるわけです。この市役所の壁面によくご覧いただくと、石像が立っているんですね。これがフランスの哲学者であったり、いろいろな有名な方なんですけど、そしてこちらの面を見ていただきますと、それがどういう人物かというのを、これは調べ上げるのもかなり大変だったみたいなんですけど、この人たちもみんな風呂敷を持っているというのが味噌でありまして。

そして、今レジ袋のプラスチックのは使わないようにしましょうという、その代替品としてあなたのエコバッグは風呂敷よね、というキャンペーンも重ねて行うということでもあります。草間彌生さんとか、いろいろご協力いただいて風呂敷のデザインなどをお願いし、そして、そこでは日本文化会館のほうでは風呂敷の包み方教室を開くなどなど、エコの部分を出してということで、ぜひこの風呂敷がパリではやると、それがまた日本で逆流して、さらにもう一度風呂敷の、何ていうんでしょうかね、便利さとか、そういった伝統的な知恵ということ、もう一度都民の皆さんにも目覚めてもらうというような趣旨がございますという大風呂敷物語です。環境大臣のころから非常にこだわってやってきました。

○青柳会長 私も4日前に、この「アール・ブリュット ジャポネⅡ」を見てきたんですけど、すごい人気で、それでやっぱりアール・ブリュットはデュビュッフェがやったから向こうが本場だったはずなのに、もう日本のほうが本場になって、いろんな特に知的障害者がいらっしゃる施設の人たちが参加しているので、バラエティがすごいんですね。そのバラエティの多さにパリっ子たちも驚いていました。ですから、こういうすばらしい催しをどんどん続けていただければと思います。

それでは、ここで最後に今日の会議のまとめとして、小池知事のほうから一言お願いいたします。

○小池知事 何よりも今日とても具体的なご意見などを伺うことができました。17万件ではなかったということなんですね。でも、やはりメダルプロジェクトってメダリストが5,000人生まれるわけですが、金・銀・銅のメダルの素材を古い携帯電話からの都市鉱山でつくりましょうというのも、大分目途はつき始めているということでもありますけど、それだってやっぱり自分の携帯が誰かさんのメダルになっていると思えば、そこでコミットメントができるわけですね。そういう意味で、17万件集めようと思ったら、それぞれの町会で夏の盆踊りをやっていますし、それをただ、でも、じゃあ数はそれでいいのかという話もありますから、ちょっとそこのところをまた精査していただいて、質・量ともに、そしてポイントはやっぱり自分が関係している、自分がこれについて協力したとい

う何か達成感とか、そういうふうにつながるような工夫もしながら、かつ3本柱がござい
ますので、未来に向けてのメッセージ、それから障害があるなしに関係なく、みんな参加
できる、そして、さらには先ほどテクノロジーの話もいただきましたし、このニューとオ
ールドが似合うというような、そのメッセージをぜひ研ぎ澄ませた形で質、量ともにそ
れ自体がレガシーと残るように、もう一工夫、二工夫していきたいと思っております。ま
た、今後とも東京全体の文化としての発信力を高めてまいりますので、ご協力のほどよろ
しくお願いいたします。

○青柳会長 知事、ありがとうございました。これにて第25回の東京芸術文化評議会
を終了したいと思います。

皆様、どうも今日はありがとうございました。

以上